

命以後は下場に出て死ぬまで働かねばならなくなつた。そして一家を擧げて働いてもその得る處は尙且一家の糊口を凌ぐにも足りない。夫れもまだ善いとして、時には又その僅かばかりの賃金を稼ぐ事の出来た仕事にすら離れねばならぬ場合が少くないのである。吁、斯くの如くんば産業革命も寧ろ無くもがなと評すべきである。

△貧富の懸隔

而も斯くの如き悲劇が世界の到る處に演せられて居る一面に於いて、少數の人は土地若くは資本を所持してゐる許りに、少しも勤勞しないにも拘らず、黄金はおのづから轉んで來て彼れの懐中に這入

り、多數をして貧乏に墮落せしめて居るのである。斯くの如き懸隔は、日々にその大を加へんとしつゝある。そして此の兩者貧富の懸隔は、日に月にその大を加へんとしつゝある。それもその筈、資本家は雪の上を轉がる雪達摩の如く一轉びする毎にその大きさを増して行くが、元來己が筋肉以外無一物の勞働者は恰度數字の0のやうなもので、0は幾許りを加へてもその合計は0より上に殖ゆる試しはないのだから。然うだ。今の世の中は恰度都會の夜の如く、一面において光輝の赫灼として其處には限りなき歡樂と飽満とがある許りであるに引代へ他の一面には死の如き暗黒があつて其處には窮乏と罪惡とがあるばかりである。而も暗黒面の範